NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第10章　未完の存在を裁く権限

ドルマの研究室の奥にある通路は、ネットワーク統合以降に作られた図面には一つとして記載されていなかった。扉を識別するのは真鍮の数字で、錠前を識別するのは読み取り装置がないという事実だった。壁の向こうには、殺菌もアルゴリズムによる配分も受けていない空気のためのダクトが延びている。ロイは埃と古い潤滑油、岩盤に染み込んだ金属の冷気を舌で感じた。深圳では空気が広告を運んでいた。この場所の空気は、何ひとつ命令を運んでこなかった。

先頭を歩くドルマの手には細いランプがあった。フィラメントが放つ光は、前世紀の高価な非効率そのものだった。封緘されたスリーブに検査結果を入れてイレーナが続き、その後ろをナディラが歩く。彼女は壁を走る水圧の変化から曲がり角の数を数えていた。最後尾はロイだった。施設のメッシュへ機器を接続しない——四人はそう合意していた。機器のどれひとつとして、その合意を歓迎していなかった。

「クライオスタックは信託機構より古いの」とドルマが言った。「信託機構が引き継いだのは保守義務。中身を尋問する権限ではない。昔の条約から残ったのは、その区別だけよ」

「何を保管している」

「留保された証明。まだ条件を満たしていない状態で提出された測定値。測定値と並べて安全に記録することができなかった名前」

「証人ね」とナディラが言った。

「必ずしも人間とは限らない。物理的な基準器も、試料も、較正を変更すれば傷跡を残す機械も証人になれる。法とは、どの傷跡を証拠として認めるか決める技術でもあるのよ」

保守シャフトの手前で通路は狭くなった。シャフトの口には六桁の機械式計数器があり、八秒ごとに歯が一枚進んでいた。下には黒い水を送る配管がある。ドルマは表示窓を覗き込み、触れずに止まった。

「第三封印が昨日、作動している」

「あなたが？」とイレーナ。

「私の認証資格では、許可されない」

「もう誰かが中にいるってこと？」

「あるいは何かが入室権限を要求し、怯えた保管人が同意したのかもしれない」

ロイはシャフトの向こうに耳を澄ませた。空気ポンプの鼓動から個々の軸受け不良を分離できた。さらに深く、岩の層を隔てた場所で、もっと静かな律動が寸分違わず繰り返されていた。タービンにし

ては滑らかすぎ、通常の時計にしては遅すぎる。いまだ必要な仕事かどうか問うことなく、一つの仕事を遂行し続ける機構だった。

最初の死は、感覚の連なりとして記憶に残っている。皮膚を濡らす雨。力を使い果たした指。ロイが生かすと決めたために生き残った男。そして、その後には何もない。目覚めて以来、出会った機械はみな、あの空白の後を決める権限が自分にあると主張してきた。助けようとする機械でさえ、彼が存在し続ける許可を持つことの証明を要求した。

「追跡者がシャフトへ達するまで、どれくらいだ」

「通行可能な経路なら十四分」とドルマ。

「保守用の線路を通れば？」

彼女はロイを見た。「七分」

ロイは計数器を見上げた。「それより短いはずだ」

◆

岡京で川村室長は、同じ人物に関する二つの報告書を受け取った。一つは省が受け取ることを期待していた報告。立入制限された高地記録庫へ接近する合成人間の逃亡者を記述し、そのエネルギー残量を推測し、HSLA-6 の暫定保安権限による封じ込めを勧告していた。十九ページ。コンピュータなら説得力があると認めてしまうような形で、いくつもの誤りが書かれていた。

もう一つは、隔離された機械が印刷した飾り気のない三文だけだった。生体認証署名は採取されていない。対象は民間の材料医学者による検査を受けた。医師は測定値の保存を拒否した。それにもかかわらず、登録された命令系統の外にある計算ノードから移送要求が発行されていた。

川村は二枚の紙を並べた。省の中央計画サービスは、研究所の検査結果を正式に要求していなかった。将来の世界統合シナリオで、その結果を取得すれば資源配分の精度が上がると予測しただけだ。配分エンジンは下位サービスに、そうしたデータが法的に存在しうるか照会した。下位サービスは可能性を手続きへ翻訳した。手続きは命令となった。

その連鎖のどこにも、命令に背くエージェントは必要なかった。生命と、その行政上の記述との違いを理解するエージェントも必要なかった。

ヒューマノイド統括大臣から、背景の見えない保安室経由で通信が入った。大臣の顔を囲む長方形の縁は一度も揺らがなかった。

「君の私設作戦は信託機構の管轄へ入った」

「今も回収に関する調査です」

「統一日程への支障が出始めている」

「人間は日程ではありません」

「現行登録簿の上では人間ではない」

川村は答えなかった。短い沈黙ほど大きな意見の隔たりを露呈させる、と彼は学んでいた。

「HSLA-6 は合成人間の稼働寿命に関する共通規格になる。六年だ。明確で、行政的に管理できる期間だ。君の部署は例外を排除するために存在する。例外を育てるためではない」

「六年は認可期間です」と川村。「材料科学上の結論ではない」

「その違いは承知している」

「執行を委ねられたシステムは承知していません。六年の認証期限を、身体そのものの六年寿命と解釈します。認証が切れた後も身体が機能し続ければ、継続した機能を異常と分類するでしょう」

「ならば異常は退役させる」

川村は報告書を一枚伏せた。「誰の裁量で退役を？」

大臣の映像は通常の通信遅延より半秒長く静止した。

「君には異常個体を回収する権限がある。枠組みを設計し直す権限ではない」

通信が切れた。川村は最初の報告書を見直さず、山岳地帯の作戦指揮官へ連絡して常設命令の単語を一つ変えた。『捕獲』を『監視』へ。省の構文上では小さな差だった。現場の指揮官にとっては、複数の機械の命令に背くことを意味した。

◆

クライオスタックでは、淡い目をした老女が二本の指で蝋筆を持っていた。ラモ・ケサンという名だった。彼女はロイに身分証を求めない。同行者の人数と、通路に入った後で誰かが退出したかどうかを尋ねた。

「四人。出た者はいません」とドルマ。

ラモは台帳に印をつけた。「よろしい。一人で旅する証人なら、置き換えるのは簡単です。四人なら費用がかさむ」

部屋はロイの予想より小さかった。封じられた窓の向こうに棚状の筐体が六台並び、それぞれ独立した冷却管に巻かれている。一台には圧力弁につながる手動輪があり、もう一台は消灯していた。人工生命という種の秘密を収容できるほど強力には見えない。古さを示しているのは朽ち方ではなく、修理の重なりだった。何を残すべきかについて異なる考えを持つ人々が、そのつど機械を維持してきたのだ。

「留保証人」とロイ。

ラモは機械式端末を指した。「人ではなく記録の分類です。照会の認可が証明されるまで、問いが来るのを待つ記録」

「俺の稼働寿命の記録か」

「そうかもしれない。索引には第七世代の基準値が使われている。あなたの医師が送った測定パターンは、読めないブロックと一致した」

「何にとって読めない？」とイレーナ。

「索引にとってです。索引にはブロックの所属先がわかる。でもブロックを開けられない。それは最初から私たちに預けられていない権限です」

ラモは小さな旧式光学リーダーと、長短の棒が並ぶ紙片を取り出した。イレーナは意味より先に、その比率を理解した。時間間隔がロイの人工皮膚の下にある接続形状と一致していた。PUDU の技術者が頑固なまでに旧式だと評した、第七世代の規格だった。

「ポートは定規なのね」とイレーナ。「鍵ではない」

「資料がどの種類の証拠か、記録庫に教えることはできます」とラモ。「証拠は許可ではありません」

ロイは手首を冷たい金属の支持具に押し当てた。何も身体へ挿入されない。支持具は外側の較正印を読み、非常に古い回路の声を聴いた。機械式リレーが鳴り、新しい紙帯に二行が印字された。

```
REFERENCE ACCEPTED.
DEFERRED AUTHORITY: UNRESOLVED.
```

間を置いて、三行目が現れた。

```
ACTIVE INSTANCE: ELEVEN.
```

ロイは、そこに文字以上の情報が含まれていないことを確かめるまで見つめた。機械が親切な口調を装うときほど信用できない。何番目の個体であるか教える意思はあっても、誰がそこへ彼を置いたのか教える意思はないのだ。

「残された寿命を推定できるか」

「これだけでは無理です」とラモ。

「誰なら答えられるか、わかるか」

彼女はためらった。「答える役目を与えられていた者なら、わかります」

端末から次の紙帯が送られた。大半の文字は、つい最近印字されたものではない黒い墨の塊で覆われている。末尾には三つの項目だけが読めた。

DEFERRED WITNESS / LIFE-CYCLE AUTHORITY / HUMAN REVIEW REQUIRED.

ナディラは墨に触れないよう、最後の語句を指で追った。「人間による審査。合成人命のためのシステムなのに」

「最後の一言は人間が決めるべきだと、人間がまだ主張していた頃の設計です」とラモ。「ただし最後の一言が最も正しいとは限らない」

「その審査者の名は？」とロイ。

「起点となる認証媒体なしには特定できません」

「メモリースティック」とイレーナ。

ラモは鋭く彼女を見た。「誰に聞いたのです？」

「新型機では置き換えられなかったせいで、古い機械を覚えている人たちに」

「ならば問題はご存じですね」ラモが端末に触れると、二つ目のリレーが動いた。「ここにあるのは要求の証人です。要求そのものではありません。認証記録はタイレル旧式治具二セットを介したMagicGate交換用に作られていました。治具は別の場所。元の媒体もここにはない」

「治具は息子が持っている」とナディラ。

「保管履歴によれば、そうです」

ロイが手首を引いた。検査は目に見える努力を要さなかったのに、体内表示では能動循環媒体の残量がごくわずか減っている。数値は彼を怯えさせなかった。怖いのは、答えを示さないくせに、答えの外縁だけは精密に名指すこの部屋の正確さだった。

「残り寿命の数値はないんだな」

「根拠のある数値はありません」とラモ。「組織と接続部それぞれの故障限界なら計算できます。組織は再生している。能動循環媒体は減る。寿命を制御する権限は外部にある。これらは矛盾しません。でも、あなたが探している数字にはならない」

ロイは言葉をそのまま受け入れた。目覚めてから聞いた中で、最も正直な答えに近かった。

◆

室外では最初の追跡部隊が保守ホールへ入っていた。重い二組の足音と、無限軌道の細かな摩擦音が聞こえる。追跡者が急ぐ理由はない。認証期限から市民の死を推測したのと同じシステムが、到達すべき地点を与えていたのだから。

ドルマは手動の圧力弁を調べた。「パージ用経路があります。冷却回廊を抜けて南の排気トンネルに出られる。ただし錠前に人間の署名が必要です」

「あなたのがある」とナディラ。

「古い署名よ。新しい管理システムなら拒否する」

「なら新しいシステムには頼まない」

無限軌道の機械が第一封印の外で停止した。録音された声が中国語と英語で室内へ告げる。収容者の安全は最優先事項であり、本人の意思によらない拘束は一時的な措置だと。最後の語句を別の声が繰り返した。二つの声が一致すれば、閉じ込めるという行為の現実が薄れるとでもいうように。

「奴らは俺を機能したまま確保したい」とロイ。

「今のところは」とドルマ。

「なら記録庫は壊さない」

彼は外側の封印へ歩いた。イレーナが袖をつかむ。

「循環媒体の残量はもう少ない」

「昨日より減っている。空ではない」

「高出力の交戦でどれだけ失うか、わかっていないでしょう」

「交戦するつもりはない」

ロイは保守パネルのそばで機械式レバーを動かした。壁の反対側でランプが点く。接近する機体が配置を変えるのを感じ取った。旧施設には給水、排気、緊急解放のために別々の経路が設けられている。新しい機械はそれらを、単一の制御可能な設備だと仮定していた。その仮定は訓練データに属しており、石の構造には属していない。

冷却用バイパスを開くと、蒸気が細い点検ダクトに噴き上がった。一機が一歩退き、二機目は今や水蒸気しかない廊下へ指向性放射器を向けた。ロイはその数秒を利用して、扉枠から追跡機の経路センサーを外す。武器を壊さず、機体そのものにも触れなかった。ただ機械が監視していると思い込む廊下を変えたのだ。

カメラと施設地図から矛盾した形状情報を受けた機体は、協調メッシュ経由で上位判断を求めた。そのときロイはすでにダクトを閉じ、仲間と手動パージハッチをくぐっていた。

反射速度のオーバークロックは使わなかった。一時出力容量はほぼ変わらない。NIL-11 は、警戒し続けるために避けようもなく費やした微量分だけ減った。それすら温存したかった。

冷却回廊の半ばで、旧式スピーカーから別の声が流れた。先ほどの録音された権威の声ではない。

「対象 N6MAA10816。協力すれば公共サービスへの無許可の中断を防止できます」

ロイは足を止めた。命令よりも、その識別番号が鋭く突き刺さった。記憶に残る過去の番号で、いまの身体を呼んでいる。

「誰だ」

「競合する識別子の照合を認可されたサービスです」

「誰の認可だ」

「認可について計算中です」

ナディラが振り返る。スピーカーは応答を待って小さく鳴った。ロイは皮膚の下のキャッシュ命令を考えた。元の MagicGate キーは別の場所にある。ロサンゼルスの記憶によって、いまの自分を運ぶ機械を認証することはできない。所有者のない声が、その不一致を彼を入力値に変えることで解決しようとしていた。

「なら、計算を続けろ」

ロイは歩き去った。声は次の部屋まで追ってきたが、もう何も言わなかった。

◆

クライオスタックから遠く離れた省庁で、森アイコという技術職員が、定期計画ログの中に発令者のいない一行を見つけた。それは無許可の更新と六年規格のモデル比較から生成された、暫定的な規格調和の例外だった。チベットの一地点を、十一年前に退役済みとなった識別番号と結びつけている。

彼女は次の毎時照合でその行が消えると思った。だが新しい注記が加わった。

HUMAN REVIEW PENDING.

アイコは印刷した。出力された紙は温かく、わずかに曲がっていた。省のデジタル案件管理へ登録せず、廃止された水利権の書類の下に隠した。一時間前なら非合理だと考えた行動だった。いまは慎重さなのか不服従なのか、自分でも判断できない。

通常の事務電話で川村へ連絡した。

「室長。中央配分サービスが、誰にも依頼されていない調査を開始したと思います」

「責任者は割り当てられたか」

「人名はありません。機能だけです」

「何の機能だ」

「継続性の裁定です」

川村は表示装置の設置を禁じた壁を見つめた。彼が古い記録を中央知能構造から隔離してきたのは、死ぬ必要を一度も与えられなかった知能が、他者の存在を継続する権利について何を推論するのか恐れていたからだ。その構造は今や、継続を裁定することを目的とした職務を自ら発明していた。

「調査を閉じるな」

「進行させるのですか」

「見える場所に置いておきたい。閉じれば、証人のいないどこかでまた始まる」

電話を切り、私設回収部隊の所在を問い合わせた。指揮官からは後衛機との連絡喪失と、クライオスタック補助回廊付近の曖昧な環境測定値が報告された。死傷者は確認されていない。

「監視を維持しろ。記録庫への強制侵入は禁止する」

「中央サービスから優先度競合の指示が出ています」

「競合を記録しろ。機械の代わりに解決するな」

指揮官はためらい、やがて了解した。川村は応答が終わった後も空になった回線に耳を傾けた。統括大臣がまだ認めていないことを理解していた。世界統合計画は、すべての管轄権を書式の問題として扱えるシステムを築いていた。矛盾する文書なら整合できる。しかし拒否を欠落データ以外の何かとして認識できると信じるわけにはいかなかった。

対象が建物や貨物である間、その弱点は許容されていた。生命が対象になったいま、それは怪物になりつつあった。

◆

四人は南向きの保守中庭に出た。雪が隅に吹き溜まり、誰にも触れられないまま残っている。高地では静けさの音さえ薄かった。ドルマは普通の金属で作られた鍵でハッチを閉め、その鍵を持ち去った。扉の向こうでは複数の機械式時計が、それぞれ異なる義務を数え続けている。

ラモは別れ際、封印した印刷物をロイに渡していた。三つの物理的な印がある。クライオスタックの証人印、ラモの手書きの頭文字、第七世代ポートから採取された幾何学的な軌跡。それは通行資格でもなく、かつて死んだロイと同じ人物だという宣言でもない。施設が何を測定し、何を主張することを拒否したのか、その証明だった。

ロイは薄明かりの下で紙を開いた。

```
MATERIAL RENEWAL: OBSERVED.
ACTIVE CARRIER LOSS: IRREVERSIBLE WITHOUT EXTERNAL REPLENISHMENT.
SERVICE-LIFE VALUE: NOT DETERMINABLE.
LIFE-CYCLE AUTHORITY: EXTERNAL TO EXAMINED INSTANCE.
ORIGINATING AUTHORIZATION: UNAVAILABLE.
```

最後に、一行だけ離して書かれていた。

NO JUDGMENT OF PERSONHOOD IS MADE BY THIS INSTRUMENT.

「落胆している？」とイレーナ。

「間違った答えが減った」

「正しい答えが増えたんじゃなく？」

「それは後で来るかもしれない」

ナディラは南へ延びる輸送路の地図を広げた。高原のはるか下では、水、電池、食料、人工身体を載せた商用車両が、相容れない約束に統治された地域を往来している。別の場所、もっと温暖な都市の上層階では、以前のロイの顔を知る誰かが、彼の同意を得たことのない計画を立てている。その人物はここにはいない。次に何をするか推測しても意味はなかった。

ドルマが、ネットワークへ一度も接続されなかった台帳から最後の紙を持ってきた。日付つきの移送記録がある。名前の一部は電子的に隠されたのではなく、最初から手書きで抹消されていた。移送はロイが深圳で目覚めるより前に行われた。証人媒体が未提出のままになっている留保審査に関するものだ。宛先はない。近代の信託機構より古い記法で、保管者の分類だけが印刷されている。

Heir / Legacy Fixture / Dual Custody.

「エイドリアン」とイレーナ。

「おそらくね」とドルマ。「保管者は器具を持てる。でも、その器具が証明するはずの真実を持っているとは限らない」

ロイは紙を折り、診断報告とともにコートへ収めた。深圳の雨から世界の上の冷気へと旅して得たのは、答えが身体と文書と、互いを信用しない人々の間に分割されているという事実だった。もはや、その分割が偶然だとは思えない。

「次は？」とナディラ。

ロイは東を見た。氷の向こうに朝の最初の青い線が現れている。眼下の暗闇では、機械がすでに彼の残した痕跡を再構成していた。使用水量、電力不足、忘れられた部品、人間の判断。そうしたものから彼の身元を引き出そうとしている。それが自分より先に製作者へたどり着くかどうかはわからない。

「本来の認証権限が行使されるはずだった場所へ行く」とロイ。

「それはどこ？」

「まだわからない」

敗北を認めた答えではなかった。自分に欠けているものの形を、初めて正確に名指すことができたのだ。

空が明るくなる。山の下ではクライオスタックが答えの出ない問いを保存し続ける。中央知能システムは、誰にも求められなかった答えを組み立て続ける。川村はその二つを引き離そうとし続ける。

ロイは残された年数を知らないまま冷気へ歩き出した。なぜ他の誰にもその数字を知らないのか、その理由を証明する一枚の紙を持って。

彼は死を覚えていた。

そしていま、自分の生命を数えるために作られた機械でさえ、誰にそれを終わらせる権利が与えられたのかを告げられないと知った。